

魂に包まれる身体

—ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について—

大 月 栄 子

序 論

「金口 (Xpudōtorios) のヨハネ (ヨアンネス・クリュソストモス, *Ieravris o Xpudōtorios*)」¹ と言えば四世紀を代表する偉大な教父・神学者であり、正教会の聖体礼儀の形式の一つに今日もその名を残している。しかしいま一人「金口のヨハネ」とよく似た名前が冠せられる教父、すなわち「金流のヨハネ (*Ieravris o Xpudōtorios*)」² と呼ばれる教父が存在する。それは東方最後の教父ダマスコのヨアンネスである。ヨアンネスは七世紀から八世紀にかけて活躍し、その流麗な説教から「金流 (*Xpudōtorios*) のヨハネ」² と呼ばれた。ヨアンネスは主にイコノクラスム運動に反対した教父として知られているが、その一方で、三一論やキリスト論が一応の落ち着きをみせた時代にあつて、ヨアンネスは独創性豊かな教父というよりもむしろ彼以前の教父らの学説を正統信仰としてまとめたオーガナイザーとして捉えられ、彼のうちには特に新しいものはないと考えられてきた。それでも、彼が規定化した教義が今日のキリスト教正統信仰の基礎となっていることは疑う余地がない。本稿ではまずダマスコのヨアンネスについてその生涯と著作活動を

概観し、本稿で扱う『知識の泉』の第三部『正統信仰論』⁽³⁾についても少しく触れる。そして、ヨアンネスの『正統信仰論』第十三章において見出される「魂」は「身体」⁽¹⁾に包まれているのではなく、火が鉄を「包む」ように「魂」が「身体」を包んでいるのである⁽²⁾。という箇所が焦点を当て、魂が身体を包むとはどのようなことかを探っていききたい。この箇所が含まれている第十三章には「神の場、神性のみが名状しがたいものであることについて」というタイトルが付けられている。したがって、「神の場」についての議論のなかにその手掛かりを求めて考察していきたい。

一 ダマスコのヨアンネスについて

ヨアンネスの家庭はダマスコの資産家であり、代々カリフの宮廷で財政を担当していた。祖父も父もカリフの宮廷で財政業務の任についていたことが知られている。ヨアンネス自身もまた祖父や父と同職に就いていたが、自ら職を辞した。辞職の時期は恐らく七二五年前後であり、宮廷でキリスト教にかかわることを公言したために、政治的な圧力を加えられたためとする説がある一方で⁽³⁾、それは七百年前前後であり、ウマイヤ朝第五代カリフ、アブド・アル・マリク (Abd al-Malik、在位六八五—七〇五) の反キリスト教政策が原因であるとする説もある⁽⁴⁾。いずれにせよヨアンネスはカリフの宮廷を辞職し、その後パレスティナで修道士となった。この時ラウラ修道院に入ったとする説が伝統的であったが、後にユダヤ砂漠にある聖サバス (マル・サバ Mar Saba) 修道院に入ったとする説が現在では有力である。エルサレム総主教ヨアンネスによれば、ヨアンネスが修道士になったのはエルサレム周辺であり、そこで没年まで過ごしたとされている。没年は七五〇年前後とされているが、事実であれば、かなりの老齢に達していたと考えら

れる。彼の神学的な著作活動の一部は官吏時代に遡る可能性も否めないが、大半は修道院での期間に行われたと考えられている。レオ皇帝治下（七二六—七三〇年）には最初の聖像破壊令が出され、ヨアンネスはイコン擁護のため皇帝に三通の講話を書き送っている。これらの講話はその時以来イコン崇敬の基本書となっている。ヨアンネスは修道院での生活の間に司祭に叙階しており、説教師としても名声を博していたので「金流のヨアンネス」と呼ばれていたのである。

ヨアンネスの著作は次の三種に大別されている。第一に正教の解説と擁護、第二に説教、第三は典礼の詩歌である。第一の分類ではヤコブ派、ネストリオス派、マニ教徒、イスラム教徒への反駁等がある。『知識の泉』もこの第一の区分に分類される。この他、著名なものとしては、神父の文書から禁欲的生活に関するテキストを収集した『サクラ・パラレラ』がある。また典礼の聖歌作詞も手掛けている。

二 『正統信仰論』について

『正統信仰論』はヨアンネスの代表作の一つであり、彼の最晩年の作とされる『知識の泉』の一部を成すものである。『知識の泉』は三部構成の大著である。その第一部は哲学章、第二部は異端論であり、第三部が今回取り上げる『正統信仰論』である。『正統信仰論』は正統信仰の百科事典のような書となっている。中世の西欧教会にも大きな影響を与えたが、それは特にトマス・アキィナスが彼の『神学大全』において典拠として多く取り上げたためである。『正統信仰論』は『知識の泉』の一部にすぎないにもかかわらず、それだけで百章にわたる大著である。そのため、内容上の

まとめりから通常四つの部分に区分されている。聖証者マキシモスの分類によると、第一章から第十四章までが神と三位一体について、第十五章から第四十四章までが創造された秩序とその中の人間、第四十五章から第八十一章までが受肉したオイコノミア、第八十二章から最後の第百章までが信仰、洗礼、十字架等の諸問題についてであるが、最後の二つの区分が少し異なる説もある。¹²⁾ いずれにしても本稿で扱うのは第十三章であるから、三位一体についての議論の中に位置づけられる。

三 『正統信仰論』第十三章の主旨

本稿では主として『正統信仰論』第十三章「神の場、神性のみが名状しがたいものであることについて」に焦点を当てて、それは今回問題とする箇所がこの章の内に含まれているためである。この章の主題は「神の場」である。それでは、なぜ「神の場」という主題が浮上したのだろうか。少し章を遡って「神の場」が問題となるに至った経緯をみておこう。『正統信仰論』の第一章から第五章までは神についてである。ここでヨアンネスは神について開示されていること以外には知ろうとしてはならないこと、神の本性は知りえないことを論じている。¹³⁾ 神は確かに存在すること、神が唯一であることなどが語られる。同時に、人間にとって神の本性が認識不可能であるということが確認される。第六章は御言葉について、第七章は聖霊についての各論であり、第八章は三位一体についてである。第九章からはそれ以前の章とは趣を変え、逆に神について語りうることを論じはじめ。神の統一と区分について述べた第十章に続き、ヨアンネスは第十一章・第十二章において、聖書における神の身体的表現を取り上げている。たとえば「神の目

とか験」などである。ヨアンネスはこの表現について、神が身体的な目を有するというのではなく、神が万物を配慮し全知であることを象徴的に示すものであると解釈している。そして続く第十三章で「神の王座」、「神の足台」、「憩いの場」など、神の場所的表現についての解釈を展開している。これらの経緯からヨアンネスが「神の場」という問題を設定したのは、非物的で空間上何らの限定も受けない神が、身体を有したり、そのために何らかの場所に限定されたりするかのような表現に対して解釈を与えるためであると考えられる。ヨアンネスはこれらの表現の解釈を通して、神が無限であり、把握しがたく、その本性が我々には開示されていないことを再度確認するに至るのである。続く第十四章は神の本性の固有性についてと題されており、ここでは神について述語しうることが列挙されている。こうして第一章から第十四章までの神と三位一体についての論述が終わる。第十一章以降のコンテクストにおいてヨアンネスは、神について何かを知る上で基本的には聖書に依拠しつつも、誤解を引き起こす表現を解説することによって、神のみが何ものにも制限されないことを強調しているのである。

四 「神の場 (τόπος θεού)」とはなにか

(一) 「場」について

当該箇所に移る前にまず「神の場」について考察していきたい。身体と魂の問題が「場」の議論の流れのうちに位置づけられているからである。ヨアンネスは「神の場」としていくつかの「場」を挙げているが、その前にヨアンネスの「場」の定義をみておこう。彼は「場」とは何かをアリストテレスを継承して次のように定義することから始め

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

ている。⁽¹⁵⁾

「場とは物的な (σωματικός) ものであり、それによって包まれているものを包み、包まれているものの限界 (πέρας τοῦ σωματικότητος) を成すものである。たとえば大気は包むものであり、身体は「包まれるものである」。しかし、包んでいるところの大気全体が、包まれた身体の間であるのではなく、包まれた身体に触れている、包み込んでいるところの大気の境界が「場となるのである」。必然的に、包むものは包まれたものの内にはないのである」(Expositio Fidei 13, 849, 邦訳六二七頁)。

この定義によると「場」とはあくまで物的なものに関するものであり、包むものと包まれるものとの関係において成立する。その際、包むもの全体が「場」ではなく、包むものの包まれるものとの接触面が「場」となるのである。包むものは包まれるものよりも大いなるものでなければならぬから、包むものは包まれるものには包含されない。以上がヨアンネスの「場」理解である。さて、ヨアンネス自身が最初に断っているように、「場」とは可視的なものであれ不可視的なものであれ、あくまで物体の接触において生じるものである。しかし、そのうえで彼は敢えて比喩的な意味で「精神的な場」と呼べるものがあるとする。

「ところで、精神的で非物的な本性のものがそこにあると考えられ、現にそこにあり、そこにあって活動し、物的にはなく精神的に包まれている——なぜなら、それは形を持たず、そのため物的に包み込まれないので——ところの精神的な場 (νοητικός τόπος) も存在する」(Expositio Fidei 13, 849, 邦訳六二七頁)。

先に「場」とは物的な包むものと包まれるものとの間に生じることを確認したが、ここでは、非物的で純粋に精神的なもの相互が包み、包まれる場合が考えられている。物的なものについての「場」概念をヨアンネスは精神

的なもの相互の關係においても比喩的に用いることができる。このため、物体を有しない神に關しても象徴的に「場」という語を用いることができる。ヨアンネスは「神の場」として次の四つを挙げる。第一に神自身、第二に神の活動と恩恵を体験する場、第三に教会、第四に神の活動が我々に開示される場である。以上の四つの場を、順を追ってみていきたい。

(一) 神自身

まず神自身を「神の場」とする場合である。先の箇所の続きを見てみよう。

「さて、神は非物質的で限界されざる者であるので、場の内にはいないのである。実に万物を満たし、万物の上におり、万物を統合している方として〔神〕ご自身がご自分の場なのである」(Expositio Fidei 13, 849, 邦訳六二七頁)。

ここでヨアンネスは神が物体ではないため、本来神に「場」という語を使うことはできないが、この場合の「場」とはあくまで比喩的な表現であると予め断っている。さらに神は非物質的であるので、いずれかの場所に限定されるものではないのであるから、かえってどこにでも存在していることになる。どこにでも、というのは、神が複数あつて、どの場所にも存在するということではない。神は「万物を満たし、万物の上におり、万物を統合している方として神ご自身がご自分の場なのである」¹⁶から、その無限定性のゆえに万物を包んでいる。このため、神は万物に遍在する。ところで「場」とは包むものと包まれるものとの接触面であるから、神は万物の場であると言うことができる。

(二) 神の活動と恩恵を体験する場

さて、神が万物を包含していることがわかった。そこで、神と万物との接する所では何が生じているのか。ヨアン

ネスは次のように言う。

「〔神〕は、混合することなしに万物に浸透しており、個々の適合性と受容能力に應じて、つまり本性と意志の純粹さに応じて、万物にご自分の活動を分与している」(Expositio Fidei 13, 839. 邦訳六二七頁)。

神は万物を包んでおり、その際個々のものとの接触によってそこから自身の活動をそれら各々のものに浸透させている。そのようにして神の本性は個々のものに伝えられる。しかし、それは万物に平等な仕方ではない。まず、各々のものはそのもの持つ神の活動を受容しうる本性に應じて神の活動を得、さらに、意志を持つ存在者に関しては、その意志が神の活動を受容すべく純粹な意志を持つか否かによって、その度合いに應じて神の活動が注がれるのである。そのため、この場合、神の活動を得、神の恩恵を受容する場が「神の場」と呼ばれるのである。

(四) 教会

教会もまた「神の場」と呼ばれている。

「そしてまた、教会も神の場と言われる。〔神〕への栄唱のための場、いわば神域として区別し、そこを〔神〕との出会いの場としているからである」(Expositio Fidei 13, 853. 六二八頁)。

ヨアンネスの言う教会が、何らかの建物を伴う物体として捉えられているにせよ、信徒の集いとして捉えられているにせよ、教会もまた、神に包まれており、そこに生ずる接触面が、人と「神との出会いの場」⁽¹⁾としてそのように称されるのである。ヨアンネスによれば、教会は他の場所とは区別され、神を賛美する場として神と人の接触する場だからである。そして教会の場合と同様に、物的な場が問題ではなく、神の活動が我々にとって開示される場すべてが「神の場」と呼ばれる。

五 神の場と被造物

以上のことから、「神の場」とは万物を包括する神自身、神の活動と恩恵を体験する場、神との出会いの場としての教会、教会と同様に神の活動が開示される場であると考えられていることがわかる。次に、ヨアンネスが定義しているように、包むものと包まれるものとの関係で「神の場」を考えていきたい。つまり、万物を包含する神と被造的存在者との接触する場についてである。被造物といつてもすべての被造物について語られているわけではなく、第十三章でヨアンネスは知性的・理性的存在者に限って言及している。すなわち天使と恐らく人間である。本稿の目的は魂が身体を包むとは如何なることかを追求することであるから、主として人間の場合を主題としなければならない。天使にはいわゆる身体はないからである。そのため、天使の「場」については簡単に触れ、その後人間における「神の場」の考察に移ろう。

(一) 天使と「場」

テキストでは天使の「場」についてごく簡単に触れられているのみである。天使は純粹に精神的な存在者であり、天使が或る「場」に存在すると言うことが可能か否か、あるいは神と同様にいずれの場にも遍在しうるのかが問われているのである。まず、天使が場所において存在するか否かが論じられる。

「天使は姿や形を持つかのように、物的に一つの場のうちに包まれることがないが、それにもかかわらず精神的な形で臨在し、その本性に応じた活動をなすがゆえに、また別のところではなく、そこで活動しているその場に精神的に限定されるがゆえに、一つの場に存在すると言われる」(Expositio Fidei 13, 853. 邦訳六一八頁)。

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

天使は身体を持たないため、物的なものとは何ものとも接触をもたない。その意味では何らかの場に在るとは言えない。他方で天使は真に精神的な存在者であるので、精神的な活動のために精神を何らかの対象に傾注する場合はある。その際、天使の活動はその対象に限定されることにならざるをえない。したがって、天使の場合、その活動が何らかの対象にのみ関わるのが、一つの場に存在するように考えられる所以なのである。しかし、実際には天使は物的にいずれかの場所に限定されるということはない。そこで次に、天使がどこにでも遍在しうるのか否かが問題となってくる。この問題に対し、ヨアンネスは次のように説明する。

「実に、異なつたいくつかの場で同時に活動することはできないのである。あらゆるところで同時に活動することはただ神のみに可能なことなのである。天使は、本性的な迅速さと、素早く、ということとはつまり迅速に移動することによって、異なつたいくつかの場所で活動する」(Expositio Fidei 13, 853; 邦訳六二八頁)。

ヨアンネスの回答は単純である。遍在は神にのみ可能であり、天使はいくつもの場に同時に精神を注ぐことはできない。したがって、天使は遍在しえない。同時にいくつもの場所に見出されるように思われるのは、その活動が敏速だからである。以上のことから、天使は包むものと包まれるものという物的な関係でいずれかの場に存在することはないが、純粹に精神的な存在者として、その精神的活動を為す対象のある「場」に存すると言ふことができる。

(二) 被造物と「神の場」

次にさらに短く、恐らく天使以外の被造物について次のように言及されている。

「ところで、魂は身体と互いに結ばれている。(魂)全体が(身体)全体と(結ばれている)のであって、一つの部分が別の部分と結ばれているのではない。また、(魂)は(身体)に包まれているのではなく、火が鉄を(包

む) ように「魂」が「身体」を包んでいるのである」(Expositio Fidei 13, 853; 邦訳六一八頁)。

これは人間および天使以外の被造物を想定して書かれていると思われる。⁽¹⁸⁾ いずれの場合にせよ、身体と魂の関係を包むものと包まれるものの関係で考えると、魂が包むものであり、身体は包まれるものであると考えられている。一般的に我々は、魂は身体のうちに残存すると考えがちであるが、ヨアンネスによればむしろ身体が魂に包まれているのである。先に述べた「場」の定義を適応すると、魂が身体を包んでいるのであるから、身体にとつて魂は「場」となるのである。なぜ魂が身体を包んでいると考えられるのか、天使の例から考えてみよう。⁽¹⁹⁾ ヨアンネスは人間について述べた別の箇所、知性的理性的被造物、つまり天使について次のように述べている。

「神は知性的実在をお造りになった。これによって私が意味するのは天使とすべての天上の秩序である。というのもこれらは極めて単純に知性的で非物質的な本性を有するからである。私が「非物質的」というとき、質料の厚みと比較して非物質的というのである。なぜなら、神のみが真に非質料的であり、非物体的だからである。これに加え、神はまた物質的実在をもお造りになった。すなわち天と地とそれらの間にあるものである。これらの実在のうち前者(知性的実在)は神に近い。知性によってのみ把握されうる理性的本性は神に近いからである」(Expositio Fidei 26, 917)。

これによると、非物質的な実在のほうがより神に近い存在者である。これは人間ではなく天使のことであるが、また人間についても同箇所ですべてに述べている。

「神は地から人の体を作り、神ご自身の息が人に理性的、知性的魂をお与えになった。それは、我々の言う神の似姿である」(Expositio Fidei 26, 920)。

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

人間は四元素からなる物体としての身体を有するが、他方で神から吹き込まれた息である理性的知性的魂をも有している。そしてこの魂こそ神の似姿である。ところで、非物体的なもののほうが物体的なものよりも、神に近いものであるから、より尊いものである。そうであるならば、神の似姿である魂は当然物体である身体よりもより尊いものであるから、魂が身体よりも大きなものとして身体を包んでいると考えるのは妥当である。以上のことから、人間においては身体に接する魂が「場」になると考えられる。

六 「魂」をめぐる二様の解釈

先の議論で、人間の身体は魂に包まれており、魂は身体にとつての「場」となることが明らかになった。しかし、先に魂が身体を包むと述べた直後の箇所では次のようにも述べられているのである。

「そしてまた、「魂」は〔身体〕の内にあるが、自分の活動をもつて活動するのである」(Expositio Fidei 13, 853. 邦訳六二八頁)。

先の引用では、魂が身体を包むと言いながら、他方で魂は身体の内にあると言う。ちょうど前後する箇所ですべてられているため、ヨアンネスにはこの両者は矛盾しないと考えられているのであろう。この両論が矛盾なく成立するためには、二つの解釈が可能である。まず、同一の魂が身体の内と外の両方に存すると考える解釈である。この場合、内なる魂は、身体を覆うことによってその接面から身体の内浸透し内在すると考えられる。いま一つは、身体を包む魂と身体の内にある魂を別様に解する解釈である。ここでは、この箇所が神の「場」の議論の流れの中に置かれ

ていることから、後者の解釈を検討してみたいと思う。まず身体の内にある「魂」とは、人間に関する章で「身体と魂は同時に形成された⁽²⁰⁾」と言われているもので、人間の誕生と共に身体の内にある。この場合の魂は身体と魂の複合体である被造物において、その生命の原理となるものである。

「魂は生きる実体であり、単純で非物体的である。その本性から身体の目には見え、有機的な身体を活動させ、身体の中で、生、成長、感覚、再生産を可能にする」(Expositio Fidei 26, 925)。

この身体と結合した魂によって、被造物は生きるものとなり成長し感覚し生殖する。この魂にはまた別の役割もある。

「魂はそれ自体とは別個なものとして精神(ヌース)というものを有しない。そうではなく、魂の最も純粹な部分としての精神を持つのである。たとえば身体に対する目のように、魂にとつても精神はそのようなものである。それは自由であり意志を授かっており、活動する力を持ち、変化に服する。すなわち意志の変化に服する。それはまた創造されたものだからである」(Expositio Fidei 26, 925)。

少なくとも人間に関する限りでは、魂は生命の原理としての栄養摂取や生殖等の役割以外に自由意志によって活動する「精神」の役割も有する。このように、身体を生命づけ、意志の働きをもって自由に活動させるのが身体の内にある魂であると考えられる。

では、身体を包む魂とは何であるか。ヨアンネスが「魂」という語を「霊」という語に置き換えている箇所があるので、参照してみよう。

「霊(πνευμα) (という語) は多様な意味で解される。聖霊(το θ̄yon πνευμα) (のことである)。そして、聖霊

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

のもろもろの力もまたもろもろの靈 (Invejaru) と言われる。さらに善い使い〔天使〕もまた靈であり、悪魔もまた靈であり、魂もまた靈である。そして、精神 (Spiritus) が靈と呼ばれたときもあつたのである。さらにまた風と大氣も靈なのである」(Expositio Fidelis 13, 857, 邦訳六三二頁)。

この箇所は神の「場」についての議論の後に短く示された三位の各位格に関する議論のなかの聖靈の部分である。ここでは「靈」の多義的な使い方が提示されている。靈とは第一義的には「聖靈」であるが、天使や悪魔のような物体を持たない存在者、被造物において非物体的な部分である魂や魂の最も純粹な部分である精神もまた靈であると言われている。つまり、魂は靈的なものと理解される。では、被造物は自身の内に有する魂や精神に包含されているであろうか。ところで、包むものは包まれるものよりもより尊いものでなければならぬ。したがって、身体を包んでいるものは被造物が自身の内に持つ魂よりもより高次の靈的なものということになる。自らの魂よりもより高次の靈的なものは天使や悪魔といった純粹に靈的な存在者であるか、あるいは神である聖靈である。しかし、天使は先にも述べたように、その活動が限定的であるため、遍在することはできない。悪魔もまた同様である。それでは、聖靈はどうであろうか。聖靈が何であるかに言及しているテキストをみておこう。

「聖靈は神である。〔聖靈は〕生まれざる方と生まれた方との中間であつて、子を通して父と一つに結ばれている。神の靈、キリストの靈、キリストの精神、主の靈、主そのもの、〔神の〕子とする靈、真理の〔靈〕、自由の〔靈〕、知恵の〔靈〕と呼ばれる——これらすべての造り主だからである。その本体によって万物を満たし、万物を一つに保持し、本体によって世界を満たしているが、世界はその力を収めきれぬものではない」(Expositio

Fidelis 13, 860, 邦訳六三〇頁)。

聖霊は「その本体によって万物を満た」すのであるから、万物は聖霊によって包まれていると解することができる。そうであるならば、身体もまた聖霊に包まれていると考えることができよう。しかし、同時に「また、〔魂〕は〔身体〕に包まれているのではなく、火が鉄を〔包む〕ように〔魂〕が〔身体〕を包んでいるのである」と述べられていた。もし火が鉄を包めば、火によって包まれる鉄は火の熱によって変形するのではないだろうか。同様に、霊に包まれる身体にも何らかの影響が伴うのではないかと考えられる。霊は身体にどのように影響していくのであろうか。これを神的なものである霊と、我々の人間性という関係で考えてみたいと思う。その手がかりとして、キリストの人性と神性の関係について興味深いテキストがあるので、それを参照しながら考察を進めたい。

七 キリストの二性とペリコーレーシス

まずヨアンネスがキリストにおける人性と神性の関係について述べている箇所を参照しておこう。

「主の(二つの)本性は互いに交流し合っている (μεταξύωμεν) と我々は主張するにしても、この相互交流 (μεταξύωμεν) は神的な本性に由来するものであると我々は知っている」(Expositio Fidei 51, 1012. 邦訳六五〇頁)。

キリストにおける神性と人性の関係は、教父らによってさまざまに議論されてきた問題であるが、ヨアンネスはここでキリストの神性と人性の関係を「ペリコーレーシス」という語で表現している。通常、「ペリコーレーシス (perikolōsis) 「相互交流」あるいは「相互浸透」]」⁽²¹⁾といえ、神の三つのペルソナ、すなわち父・子・聖霊間の関係を

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

表す語である。⁽²⁾ 神の三位格間の関係を表す「ペリコーレーシス」の用法は、古くは金口のヨアンネスが言及しているが、ダマスコのヨアンネス自身がこれを標準化させたのである。⁽³⁾ 実際、『正統信仰論』第八章「聖なる三位について」は三位格の関係の詳細な議論であり、ダマスコのヨアンネスはここで、父・子・聖靈の三者がそれぞれに三つの完全な個別者として区別される一方で、混合されない仕方では結合されていると説明している。父・子・聖靈の三者間の関係について議論されているこの箇所から、三者間の用法で「ペリコーレーシス」が使われていることを確認しておきたい。

「子がついているものは何であれすべて、霊もまた父からのものとして持っている。それには存在そのものも含まれる。もし、父が存在しないとすれば、子も霊も存在しない。もし、父が何かしらをもっていないとすれば、子も霊もそれをもっていない。それで、父のゆえに、すなわち、父が存在するがゆえに、子も霊も存在する。子と霊がついているものは何であれ、父のゆえ、すなわち父がそれらをもっているからである。ただし生まれざるものであること、生まれたものであることは別である」(Expositio Fidei, 824, 邦訳六一八頁)。

まずここでは、父・子・聖靈が、原因のないもの、生まれたもの、発出されたものであることを除いては本質上区別がなく、同じ神性を有すると述べられている。三者が同一の本質を有することを確認したうえで、ヨアンネスは三者それぞれが完全性を持った個別の実体であることも述べている。

「本体によってではなく、個別者としてのご自分の特徴によって、分割されることなしに、区別されるものとして、ただこれらの個別者としての固有性においてのみ聖なる三つの個別者は互いに相違しているからである」

(Expositio Fidei 8, 824. 邦訳六一八頁)。

そして、これら三者は混合されることなく「ペリコーレーシス」という仕方でも相互に交流している。

「(三者は) 一つになっているが混合されてはおらず、互いに固く結ばれている。そして、互いの内に交流があるが (τιν ἐν ἑαυταῖς περικολληθῆναι) そこにはいかなる混和・混合もなく、アレイオスの分割のような、分離や本体による区分別もないのである」(Expositio Fidei 8, 829. 邦訳六一〇頁)。

この箇所では「ペリコーレーシス」は父・子・聖霊相互の関係を説明するために使われている。これは神の三つのペルソナが相互に内在し、浸透し合っているという三者のダイナミックな関係を表す通常の「ペリコーレーシス」の神学的用法である。ヨアンネスは三者が混合せず、一致していることを「ペリコーレーシス」で表現しているのである。しかし先の箇所でもヨアンネスはこの「ペリコーレーシス」をキリストの人性と神性の間の関係にも適応している。同じ「ペリコーレーシス」という語であるが、この場合の神性と人性の交流の仕方は三位間のそれとは異なるはずである。なぜなら、そもそも父・子・聖霊の間での「ペリコーレーシス」が可能になるのは、三者が同一の本性を有するからこそである。しかしキリストにおける神性と人性では、本性上かなりの相違がある。そのため、元来神性と人性の二つの本性が浸透し合うということはないように思われるのである。だが、ヨアンネスは「ペリコーレーシス」という働きを神性のみを求めることでこれを解決している。ヨアンネスは、この二性間の「ペリコーレーシス」は「神的な本性に由来するものである」と考えているのである。ヨアンネスは次のように言う。

「(神的な本性は) 欲するままにすべてのものに行きわたり、浸透するが、何物も (神的な本性) に (浸透すること) なく」(Expositio Fidei 51, 1012. 邦訳六五〇頁)。

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネスにおける「神の場」について——(大月)

キリストの二性の交流は決して相互的なものではなく、神性から人性への一方的な浸透である。なぜなら、人性であれ何であれ、神性以外のものが神性へと浸透していくということはありえないからである。神性が何かと交流するときは、必ず神性の側から何かに浸透していくという仕方であらうのであり、何かは神性の内に浸透するのではない。父・子・聖霊の三者間で相互的な交流が可能なのは、三者とも神性を有するからである。

八 身体と魂の関係と「ペリコーレーシス」

以上でみてきたように、ヨアンネスに、あるいは教父の伝統に従えば、キリストにおける神性と人性の関係は、父・子・聖霊の関係と同様に「ペリコーレーシス」で表される。しかし父・子・聖霊の三位格相互の関係であるペリコーレーシスとは異なり、キリストの神性と人性の関係においては、神性のみが一方的に人性に浸透していくのである。先の「場」の定義に戻ってみると、包むものと包まれるものの接触面が「場」となるのであるが、この時包んでいるもののほうが包まれるものよりもより大いなるものであつて、包むものが包まれるものの「場」となるのであつた。キリストにおける神性からの人性への一方的な浸透は、「場」の関係で考えたとき、より大いなるものである神性が人性を包み人性へと浸透していると考えられることもできる。魂と身体の関係においても同様のことが言えるのではないか。再び魂と身体との関係に立ち戻つて考えてみよう。魂のほうが身体よりもより大いなるものと考えられているため、魂が身体を包み、その接触面から魂が身体へと浸透していくのである。ところで、先の議論では二通りの解釈が可能であると述べた。一つは、文字通り生命原理であり、知性を司る魂が身体を包み込み、身体へと浸透するというもの

であつた。いま一つは魂を靈と考えるものであつた。本稿では、魂が身体を包むと述べている当該箇所が神の「場」の主題の中で語られていることを鑑みて、この場合の魂を生命原理とは別のものである「靈」ではないかと考えてきた。先に見たように、ヨアンネスは魂を「靈」と区別することなく使用する場合があつた。したがつて、身体を包む靈は聖靈と考えることもできるのではないだろうか。そうすれば、魂と身体の問題が、「神の場」という文脈の中で語られていることも意味を持つてくるように思われるのである。神の靈が身体を包み、身体との接触面を通して身体に浸透し、被造物を靈的なものへと神化させる。先にみた「神の場」では神自身が「場」であつた。また神の活動と恩恵を体験する場が「神の場」であつた。そのように考えると、身体を包む靈が我々被造物にとつての「神の場」となるのである。

結 論

以上でみてきたように、「魂が身体を包む」という問題は、「神の場」の議論のなかに位置づけられていた。「場」とは、物的な意味において包まれるものと包むものとの接触面に生じるものであつた。ヨアンネスはこの「場」の定義を比喩的に精神的なものにも適応させている。「神の場」とは具体的には万物を包む神自身であり、そこにおいて神の活動が露わになるような場すべてである。これを魂と身体の問題に当てはめて考えたとき、魂は身体よりもより大いなるものであるから、魂が身体を包むのである。身体を包む魂の身体との接触面が「場」となる。この時、魂は各個体に属する生命原理となるものとそれ以外のものである可能性があつた。本稿では、この問題を「神の場」の議

論の流れの中でとらえるべく、魂を個体に属する者とは別の霊であると仮定した。これを聖霊と考えると、聖霊が身体を包む面が神と身体との接触面となり、そこに「神の場」が生じる。それは我々被造物、特に人間においてはキリストの神性が人性に浸透していくように、神の霊が我々の人間性に浸透してくる場であった。その際、我々の内にあるより神的なものである魂がこれに呼応する仕方でこれを受容するのである。個体に属する魂は聖霊と同一のものではないとしても、神の似姿としてより神的なものであるからである。このことにより我々のうちの神の似姿は鉄が火によって形を変えられるようにより神に近いものとなりうるのである。魂が身体を包む面、そこは神の活動と恩恵を体験する「神の場」なのである。

【テキスト】

P. Bonifatius Kotter, O. S. B., *Die Schriften des Johannes von Damascos, herausgegeben vom Byzantinischen Institut der Abtei Scheyern II, Patristische Texte und Studien Bd. 12*, Berlin, N. Y., 1973.
 Tr. by Frederic H. Chase Jr., *The Fathers of the Church — St. John of Damascus Writings*, The Catholic University of America Press, Washington D. C., 1958.
 小高毅訳「知識の泉・第三部正統信仰の解明」上智大学中世思想研究所・大森正樹監修『中世思想原典集成』後期ギリシア教父・ヒザンテーン思想』平凡社、一九九四年。

註

- (1) 現代の教父学では、東方はダマスコのヨアンネス、西方は大グレゴリウス教皇（六〇四年没）あるいはセベリアのイシドルス（六三六年没）を最後の教父としている。教父の定義については、小高毅「古代キリスト教思想家の世界——教父学序説」創文社、一九八四年、二〇—二二頁参照。
- (2) 教父ギリシア語辞典で *Χριστολόγος* は「ダマスコのヨアンネスの通り名」と掲載されている。Ed. by G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon*, p. 1535.
- (3) 「知識の泉」第三部の原文タイトルは *Εκδοσις ἀρχαίης τῆς ὀρθοδοξίας πίστεως* であるが、今回使用したテキストに

は *Expositio Fidei* というラテン語のタイトルが付けられている。同テキストから邦訳された小高訳ではこの *Expositio Fidei* というタイトルを『正統信仰の解明』という邦題にしている。しかし、*expositio* は元来「解釈、説明」といったほどの意味である。またこれまで『知識の泉』第三部は *De Fide Orthodoxa* のタイトルで知られてきたことなどから、本稿では『正統信仰論』とした。

(4) 原文で体を意味する *corpus* は、邦訳テキストではすべて「肉体」と訳されているが、本稿では、論文タイトルに合わせる「身体」とした。

(5) *Expositio Fidei* 13, 853, 邦訳六二八—六二九頁。

(6) ヨアンネスは名高い財産家のキリスト教徒の家庭に誕生した。彼の父親はキリスト教徒の捕虜を買い戻すなどの善行のために財産を使っていたと伝えられる。この捕虜のうちの一人は修道士で、教育熱心なヨアンネスの父はその修道士に息子の教育を依頼していた。この修道士は後のマイウマ主教コスマスであったという伝説がある。晩年ヨアンネスはコスマス宛てにこの『知識の泉』を書いている。F. Alfred Perrier, *Jean Damascene — Sa Vie et Ses Ecrits*, Kessinger Legacy Reprints, Strassburg, 1962, p. 9.

(7) John Anthony McGuckin, *The Westminster Handbook to Patristic Theology*, p. 9.

(8) ヨアンネスはカリフに右腕を切り落とされ公衆に晒され

たが、詩編を唱えながら聖母に祈っていると右腕が奇跡的に回復したという伝説が残っている。Perrier, pp. 11-12.

(9) 『新カトリック大事典Ⅳ』研究社、二〇〇九年、一一二—一頁参照。

(10) ヨアンネスはイスラム圏に生まれ育ち、直接的にイスラム教を経験していた。彼はキリスト教の立場からイスラム教に対しては、新宗教というよりキリスト教の一つの異端的逸脱として捉えていたようである。McGuckin, p. 192.

(11) 『知識の泉』はマイウマの主教コスマスに献呈されている。コスマスの主教就任は七四三年であり、ヨアンネスの死去は七五〇年ごろと推定されている。このため、『知識の泉』は最晩年の著作と考えられている。小高毅訳「知識の泉・第三部正統信仰論の解明」、上智大学中世思想研究所・大森正樹監修「中世思想原典集成」3、後期ギリシア教父・ビザンチン思想』平凡社、一九九四年、五九〇頁から五九二頁の解説参照。

(12) ビサのブルグンディオによる一二二四年のラテン語訳では、第三の区分が第四十五章から第七十三章まで、第四の区分が第七十四章から最後の第百章までとされている。Andrew Louth, *St John Damascene — Tradition and Originality in Byzantine Theology*, Oxford Early Christian Studies, Oxford University Press, Oxford/ New York, 2002, pp. 84-85.

- (13) 「神は把握しえないこと、聖なる預言者と使徒ならびに福音書記者がわれわれに伝授しなかったことを探究したり詮索したりしてはならないこと」Expositio fidei, 1, 邦訳六〇〇頁。偽ディオニュシオスにこれと類似した記述がみられる。「したがって、一般的にいって、存在を越えて秘められた神性について、聖なる書において我々に神にふさわしく開示されたこと以外には、敢えて語ったり考えたりしてはならないのである」Divinus Nomibus, 588A, ディオニュシオス・アレオバギテース、「神名論」『キリスト教神秘主義著作集Ⅰ』教文館、一九九二年、一三九頁。
- (14) Expositio fidei 11, 841.
- (15) アリストテレス『自然学』IV, 4, 210b32 以下参照。
- (16) Expositio fidei 13, 849, 邦訳六二七頁。
- (17) Expositio fidei 13, 853, 邦訳六二八頁。
- (18) この章は『正統信仰論』のなかで神と三位一体論の部分に位置づけられるのであるから、あるいは受肉したキリストについての記述であるかもしれない。
- (19) 天使も純粹に靈的存在者であるが、神と同様に完全に靈的ではなく、靈的身体のようなものが考えられているのであろう。
- (20) Expositio fidei 26, 920-921.
- (21) Expositio fidei 13, 860, 邦訳六三〇頁。
- (22) Expositio fidei 13, 853, 邦訳六二八頁。
- (23) 「ペリコーレーシス」とは、元来は「回る、循環する、交替する」というほどの意味である。Compiled by Henry George Liddell and Robert Scott, *A Greek-English Lexicon*, Clarendon Press, Oxford, First edition published 1843, New supplement added 1966, p. 1394. 新ブライテン主義では、魂の、身体に包括されない仕方での身体との関わりを表す語として用いられていた。この意味では、身体の内にある魂と身体を包む魂は同一のもと考えられるほうが伝統的であるかもしれない。これについては「ペリコーレーシス」の用法を遡って調べる必要がある。McGuckin, pp. 260-261.
- (24) 第八章の冒頭部分 (Expositio fidei 8, 809) でミアンネスは、三位が個別者であり、また同一本質を持つことを説明しているが、この箇所では「知られぬ (γνωστέον)」や「混同することなく (ἀσυνύτρεος)」という語を使っている。これらと同じ語がカルケドン信条で使用されており、カルケドン信条の影響がうかがわれる。しかしこれらの語はカルケドン信条ではキリストの二つの本性に関する記述において見られるものである。このことから、キリスト論のなかで使用されてきた専門用語が三位一体論の用語へと転用されてきた経緯が読み取れる。「ペリコーレーシス」はキリスト論から三位一体論に転用された用語の最たるものである。Louth, p. 104.

(25) McGuckin, pp. 260-261.

(26) キリストにおける神性と人性の關係に「ペリコーレーシス」を用いたのはヨアンネスが初めてではない。ナジアンゾスのグレゴリオスがすでに「書簡一〇一」等で言及している。ヨアンネスはナジアンゾスのグレゴリオスの考えを繼承しているものと思われる。ナジアンゾスのグレゴリオスがキリストにおける二性の關係に「ペリコーレーシス」を導入したのは、人間の神化の根拠としてであると考えられてゐる。Basil Studer, Ed. by Andrew Louth, *Trinity and Incarnation — The Faith of the Early Church*, T & T Clark, Edinburgh/ New York, 1993, p. 196.

(27) Expositio Fidei 51, 1012. 邦訳六五〇頁。